千葉大学医学部同窓会報

# あのはな

第201号　発行日　2026年９月15日

編集発行者　千葉大学医学部あのはな同窓会報編集部

〒260-8670　千葉市中央区亥鼻1－8－1
千葉大学医学部内　あのはな同窓会
電　話（043）202-3750
ＦＡＸ（043）202-3753
E-mail : info@inohana.jp
HP : https://www.inohana.jp/

題字　故 鈴木五郎（大11卒　元あのはな同窓会長）

## 令和８年度　あのはな同窓会総会開催　―東京あのはな会 担当―

**令和８年度あのはな同窓会総会が、令和８年６月13日（土）15時30分より銀座アスターお茶の水賓館で開催された。**

安西尚彦副会長の司会により開会となり、会議に先立ち物故者115名の冥福を祈り黙祷を捧げた。吉原俊雄会長の挨拶の後、各議事が進められ、すべて審議・了承された。（議事要旨は26～27面に記載）

総会に引き続き令和８年度あのはな同窓会賞の表彰式が行われ、社会貢献賞の笠貫宏先生、功労賞の奥村康先生より受賞の挨拶があり、特別顧問の三木隆司千葉大学大学院医学研究院長・医学部長、大鳥精司千葉大学医学部附属病院長よりビデオメッセージによる挨拶があった。続いて吉村健佑氏の司会で、松本晴樹氏による「2030年、2040年に向けて、医療はどうなる？医療政策、社会変化、医師の意識変化を踏まえて」の講演会が行われた。懇親会では和やかな歓談の時を過ごした。




## 第31回（2026年度）あのはな同窓会賞　受賞者決定

**社会貢献賞**　笠貫　宏（早稲田大学総長室参与、医療レギュラトリーサイエンス研究所顧問・昭42卒）
「大学・各省庁横断的な国家医療戦略に多大な貢献」

**功　労　賞**　奥村　康（順天堂大学大学院医学研究科アトピー疾患研究センター長・昭44卒）
「国内外の研究・臨床・教育を牽引する免疫学のトップランナー」

## 祝　叙　勲

令和８年　春の叙勲　　瑞宝中綬章　末石　眞（昭48）
瑞宝小綬章　小林　繁樹（昭54）

## 紙面紹介

総会開催 …… 1
あのはな同窓会賞 …… 2～3
就任挨拶 …… 4～10
人事異動 …… 5
役員紹介 …… 11
受賞の挨拶 …… 12～13
各地あのはな会だより …… 14
ホームカミングデー …… 15
クラス会 …… 16～18
会員から …… 19
学内情報 …… 20
献体の集い …… 21
欧州医学史巡り …… 22
著書紹介 …… 23～25
議事要旨 …… 26～27
おくやみ …… 28
編集後記 …… 28

社会貢献賞

# 同窓会受賞後の挨拶

早稲田大学総長室参与、医療レギュラトリーサイエンス研究所顧問　笠　貫　　宏（昭42）

本日は、このような賞をいただき、ありがとうございました。一言ご挨拶申し上げます。

68年前、坊主頭で入学し、大学で過ごした６年間は、私にとってかけがえのない青春時代でした。インターン闘争では、仲間と徹夜で国のあるべき姿を熱く語り合い、日本の医学教育を憂い、厚生省へのジグザグデモや機動隊の壁に向き合った日々が懐かしく思い出されます。

その後、医療事故を機に大学を離れ、当時の日本医師会長（後に世界医師会長）であった故・武見太郎先生に師事しました。法制部嘱託として、医師賠償責任保険制度の立ち上げと運用を中心に、すべての委員会に参加させていただきました。戦後の国民皆保険制度が確立された後の混乱期に、医学・医療界が抱えていた課題から国際保健の課題に至るまで、多くを学ぶ機会を得ました。とりわけ、自然科学と人文社会科学の融合による「病を医し、人を医し、社会・国を医し」という姿勢を学び、ただひたすらに医師人生を歩んでまいりました。その歩みが、本日の社会貢献賞につながったのではないかと思っております。

故・武見太郎先生は、優れた臨床医であり、物理学者であり、哲学者であり、政治学者でもありました。また、生存科学という新たな概念を提唱され、晩年にはハーバード大学T. H. Chan公衆衛生大学院に武見国際保健プログラムを創設されました。

東京女子医科大学では、循環器内科学の研究・診療・教育に没頭しました。附属日本心臓血圧研究所所長就任直後、日本初の心臓移植手術を経験し、研究所の創設者である故・榊原仟先生の「鬼手仏心」という教えの重みを改めて実感しました。



東京女子医科大学定年後は、早稲田大学において医理工連携に取り組み、さらに文理融合によるレギュラトリーサイエンスの学問体系の構築に挑戦しました。科学技術と人・社会の調整・最適化を図るレギュラトリーサイエンスを、評価科学から行政科学、さらには公共政策学へと展開してまいりました。

その過程で、薬事行政、労働行政、航空行政、電波通信行政など、多様な行政分野に関与しました。新型コロナパンデミックに際しては、民間臨時調査会や日本医師会COVID-19有識者会議に参加し、さらに、MEJ理事長としてアジア健康構想における日本医療の国際展開、四次元医療研究会会長として医療DX令和ビジョン2030にも力を尽くしました。そして最後には、内閣府参与として、ゲノム医療からグローバルヘルスまで含む、国家の第３期健康・医療戦略に参画する機会をいただきました。

今、故・武見太郎先生の教えに照らしますと、私がこの賞に値するか自信はありません。しかし、私の人生にとっては感無量の栄誉であり、心から感謝申し上げます。

不安定さと混沌さを増すグローバル・デジタル社会において、千葉大学医学部が、総合大学の強みを最大限に生かし、さらに発展されることを心より願っています。



功　労　賞

# ねのはな同窓会　功労賞を受賞して

順天堂大学大学院医学研究科アトピー疾患研究センター長　**奥　村　　康**（昭44）



この度、吉原同窓会長の推挙で功労賞をいただき大変光栄です。私は、大学紛争のピーク時の卒業で、級友はほとんど大学外で研修をしました。故あって基礎医学の病理学の大学院に入りましたので、亥鼻を拠点に研究生活をスタートすることになりました。当時の千大病理学は、滝沢延次郎、岡林篤の両教授が主宰しておられ、全くタイプの違う両巨頭に接し、又、在籍しておられた多くの諸先輩の教えを受けることが出来ました。大学院に入学した夏に岡林門下生の助手、多田富雄先生が、米国の石坂公成先生の下での留学を終えて帰国され、羽田にお迎えに行きました。「大学はバリケードで封鎖されているようだが、君は入れるね」と言われ、牛乳瓶のような容器を手渡され「研究室の冷蔵庫へ入れてくれ」と頼まれました。瓶の中身は、石坂先生が発見されたIgEに対する抗体だったのです。後日、日本中の免疫アレルギー関連の研究をされている教授方が、この抗IgE抗体を求めて研究室に来室され、その貴重さを身をもって知りました。私は若い頃から頭髪少なく、多田先生より年上に見られたせいか、多田先生と間違って全国の教授方が丁寧に挨拶され、代わりにあちこちからのお土産も受け取った次第です。米国の免疫蛋白化学の最先端での研究成果で高名になられた石坂先生の下で働いておられた多田富雄先生は、同じ蛋白化学では米国に勝てないことを自覚しておられ、私に与えられた研究テーマは、IgE抗体を産生するリンパ球細胞間の相互作用の解明です。そこで偶発的に発見したのが、IgE抗体を産生する細胞群を抑制するサプレッサーT細胞です。その発見が、当時の世界の免疫学界の大きなトピックスになり、私は以後今日まで、異なったリンパ球同士がいかなる言葉（分子）で話し合っているのかといった研究を続けております。業績に関しては、先日の同窓会で東医大の横須賀教授がうまくまとめて下さり、感謝しております。当時、副科目でお世話になった解剖学の永野先生に叱咤されたのは、教科書にも残るような研究をしろということでした。私が関与して結果として現在の医学の教科書に載っているものは、サプレッサーT細胞、CD80/86、パーフォーリン、NK細胞等がそうですが、今一番同僚達とで力を注いでいるのは、動物実験で解明したCD80/86分子を介した免疫反応を抑制するという現象を臨床応用することです。人の臓器移植は拒絶との戦いです。薬としては、やはり私達の同僚が関与して当時の“藤沢薬品”で開発されたタクロリムスが主役ですが、私達が開発した抗CD80/86を使用した治療法は、薬に頼らない拒絶抑制に成功しつつあります。夢であった“免疫寛容”の導入への試みです。長い時間をかけ、人の治験を完了し、やっとPMDAを通りそうです。近々、私達の研究成果が臨床の先生方にも役に立ちそうです。最も激しい移植拒絶反応が抑制出来れば、異常な免疫反応によって惹起される多くの免疫病にも応用出来ると夢見て、若い後輩と研究を続けております。



## 就　任　挨　拶

### 千葉大学医学研究院　医療の質・安全学講座　教授就任のご挨拶

滝　沢　牧　子（群馬大・平７）



令和８年４月１日付をもちまして、千葉大学医学部附属病院　医療安全管理部部長、千葉大学医学研究院　医療の質・安全学講座の初代教授を拝命いたしました。同窓会の皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

私は平成７年に群馬大学を卒業後、血液内科を専攻し、関連病院での勤務や米国NIHへの留学を経て、血液内科領域の臨床・教育・研究に携わってまいりました。その後、群馬大学で発生した医療事故を契機に医療安全部門の専従医師として従事することとなりました。病院の再生に向けた様々な取り組みに関わる中で、この仕事の重要性を深く認識するに至りました。

より安全で質の高い医療を提供することは、患者さんと医療者にとって共通の願いであります。一方で、医療には常にリスクが伴うこともまた事実です。医療の質・安全学とは、多職種が動的に協働しながら作り上げている医療現場において生じるリスクを適切にマネジメントするための実践科学であり、患者さんと医療者双方の思いをつなぐ営みであると考えております。

このたび伝統ある千葉大学において、診療実務・研究のみならず、次代を担う医療人の育成、さらには地域および全国の医療安全の向上にも一層貢献できる立場をいただいたことを、大きな喜びと責任の両面から受け止めております。臨床現場での経験を踏まえつつ、エビデンスに基づいた医療の質・安全学の体系化と、それを実践に活かす人材の育成に努めてまいりたいと存じます。

微力ではございますが、千葉大学医学部および附属病院の発展、そしてわが国の医療の質・安全学の向上に尽力してまいる所存でございます。同窓会の皆様には、ご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

### 千葉大学大学院医学研究院　イノベーション再生医学　教授就任のご挨拶

髙　山　直　也（筑波大・平13）



このたび、千葉大学大学院医学研究院において教授を拝命いたしました。長年にわたり研究活動を行ってきた千葉大学で、このような重責を担う機会をいただき、大変光栄に感じております。

私はこれまで一貫して、組織幹細胞やiPS細胞を用いた再生医療の研究に取り組んでまいりました。学生時代より幹細胞の持つ可能性に魅了され、ヒト多能性幹細胞から血液細胞を誘導する技術の開発や、iPS細胞由来血小板の作製とその臨床応用に向けた研究に携わってきました。また、造血幹細胞の自己複製や分化を制御する仕組みを、エピゲノムやクロマチン構造の観点から明らかにする研究を進め、基礎研究と臨床応用の橋渡しを目指してまいりました。これらの研究成果は、再生医療のみならず、幹細胞生物学の理解を深めるうえでも重要な知見となっています。

2016年より千葉大学先端研究部門イノベーション再生医学に所属し、幹細胞研究、エピゲノム研究、細胞リプログラミング、さらには造血系の再生研究を推進してまいりました。その過程では、学内の多くの部門の先生方と共同研究を進める機会に恵まれ、研究の対象は骨・軟骨組織の再生や創傷治癒の分野へと広がっていきました。専門分野の垣根を越えた連携の重要性を日々実感しており、千葉大学の持つ総合力と多様性こそが、新しい医療を生み出す大きな原動力であると感じています。

再生医療は、基礎研究の成果を実際の治療へと結び付けることのできる、極めて夢のある分野です。一方で、患者さんに新しい治療を届けるためには、長期的な視点に立った地道な研究と、多くの研究者・医療者との協力が不可欠です。私はこれまで培ってきた研究基盤をさらに発展させ、千葉大学における再生医学研究の一層の発展に貢献するとともに、次世代を担う若手研究者の育成にも力を注いでいきたいと考えております。

そして今後は、これまでの幹細胞研究や細胞リプログラミング研究を基盤として、新たな細胞療法の開発に挑戦したいと考えています。基礎研究で得られた知見を医療へとつなぎ、難治性疾患に苦しむ患者さんへ新たな治療の選択肢を届けること、そして私たちが築いてきた再生医療研究の知識や技術、志を次の世代へ受け継ぎ、さ

らにその先へと発展させていくことが私の大きな目標です。

同窓生の皆様、諸先生方のこれまでのご支援に心より感謝申し上げます。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

## 千葉大学大学院医学研究院　国際アレルギー粘膜免疫学　教授就任のご挨拶

倉　島　洋　介（明治大農・平17）



このたび、令和８年４月１日付で千葉大学大学院医学研究院　国際アレルギー粘膜免疫学教授を拝命いたしました。歴史と伝統ある千葉大学医学部の一員として、このような重責を担う機会をいただきましたことを大変光栄に感じるとともに、身の引き締まる思いでおります。

私は2016年11月に東京大学医科学研究所より千葉大学大学院医学研究院イノベーション医学分野の准教授として着任し、これまで一貫して粘膜免疫学を中心に研究を進めてまいりました。

私たちの身体は、腸管や気道などの「粘膜」を介して常に外界と接しています。私は、この生体最前線に存在する免疫システムに着目し、粘膜免疫を起点として、免疫系と周囲の組織との相互作用や臓器間の連携機構を解明することで、炎症性腸疾患やアレルギー疾患の克服を目指して研究を進めてきました。

近年、免疫学は飛躍的な発展を遂げ、基礎研究の成果が新たな診断法や治療法として社会に還元される時代となりました。一方で、依然として根本的な治療法が十分ではない疾患も数多く存在します。私たちの研究室では、免疫細胞のみならず、その周囲の微小環境や臓器間の連携機構にも着目し、炎症性腸疾患やアレルギー疾患の新たな病態理解と治療戦略の創出に取り組んでおります。それに加えて、最近では、膵臓由来糖タンパク分子のGlycoprotein 2が腸内細菌を制御し腸粘膜を守る新たな「臓器連関」の仕組みを明らかにし、その知見を基盤とした診断法・治療法の開発を進めています。

また、本分野の名称にもある「国際」を重要な柱と考えています。これまで米国カリフォルニア大学サンディエゴ校（UCSD）をはじめとする海外研究機関との共同研究を推進し、研究者や学生の国際交流にも取り組んでまいりました。さらに近年は、ブラジル・アマゾン国立研究所（INPA）をはじめとする海外研究機関との交流を進めております。生物多様性に富むアマゾン地域の研究資源と、千葉大学が強みとする多様な学術領域を結び付けることで、新たな国際共同研究の創出につなげたいと考えております。

教育面では、次世代を担う学生や若手研究者の育成を重要な使命と考えています。研究は一人では成し遂げられません。多様な背景を持つ人々が互いに学び合い、新たな価値を創造することが大学の大切な役割であると考えています。学生には、世界を知り、研究を好きになり、そして研究を楽しむ姿勢を持ちながら、自ら道を切り拓いてほしいと願っています。

最後になりましたが、これまでご指導・ご支援を賜りました先生方に心より感謝申し上げます。千葉大学医学部およびねのはな同窓会の発展に微力ながら貢献できますよう努めてまいりますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

## 人事異動

**教授**

麻酔科学
　田口奈津子（平元）
血液内科学
　堺田恵美子（浜松医大・平６）

**准教授**

感染病態学
　宮本　　翔（岩手大・平28）

**講師**

眼科学
　新沢　知広（弘前大・平21）

## 東京女子医科大学　医療安全学講座　主任教授就任のご挨拶

小　松　康　宏（昭59）



このたび、東京女子医科大学に新設された医療安全学講座の主任教授を拝命いたしました。ゐのはな同窓会の諸先生方に、謹んでご報告申し上げます。

私は千葉大学医学部卒業後、聖路加国際病院ならびに東京女子医科大学で臨床経験を重ねる中で、医療の質と安全は個々の医療者の努力だけでなく、組織やチーム、そして医療システム全体のあり方によって大きく左右されることを実感してまいりました。その後、米国の公衆衛生大学院にて、公衆衛生実践リーダーシップを専攻しました。医療を取り巻く複雑な課題に対して、組織をどのように導き、多職種の力を結集して、持続的な改善につなげるかを学んだ経験は、その後の私の活動の大きな基盤となっています。

2011年から聖路加国際病院において医療の質・安全を担当する副院長を務め、病院全体の質改善と患者安全の推進に携わりました。国際的な医療安全基準や質評価の考え方を実践の中で学び、事故を個人の責任に帰するのではなく、組織として学び、改善し続けることの重要性を強く認識しました。2017年から2023年までは、群馬大学大学院医学系研究科医療の質・安全学講座の教授として、大学病院の医療安全体制の整備、教育、研究、人材育成に取り組んでまいりました。

近年、医療安全は単に「事故を防ぐ」ための活動という枠を超え、医療の質、患者中心性、組織文化、レジリエンス、学習する医療システムといった幅広い概念を包含する学問領域へと発展しています。東京女子医科大学の新たな講座では、こうした国際的な潮流を踏まえ、病院全体の医療の質・安全向上に貢献するとともに、医療安全学教育の体系化と研究の推進を図り、国内外に成果を発信していきたいと考えています。

また、群馬大学在職中にともに医療安全に取り組んだ仲間である滝沢牧子先生が、現在、千葉大学の医療の質・安全学の教授を務めていることにも、深い感慨を覚えています。医療安全を志す人材の輪が次の世代へとつながり、それぞれの大学で新たな役割を担っていることを大変うれしく思います。

亥鼻で学んだ一人として、これまで多くの先生方からいただいたご指導とご支援に深く感謝しております。今後も、安全で質の高い医療の実現と医療安全学の発展に微力ながら尽力してまいります。ゐのはな同窓会の諸先生方におかれましては、今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

## 京都大学iPS細胞研究所　所長就任のご挨拶

江　藤　浩　之（山梨医大・平２）



同窓の皆様には、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

私は2016年10月から2024年９月まで千葉大学医学研究院教授（イノベーション再生医学）を、その後は特任教授を務め、本年４月より京都大学iPS細胞研究所（Center for iPS Cell Research and Application: CiRA）の第三代所長に就任いたしました。千葉大学在職中は、多くの先生方や同窓の皆様に支えていただきました。この場をお借りして、改めて心より御礼申し上げます。

本年は、2006年にiPS細胞が発表されてから20周年という大きな節目の年にあたります。京都大学ではこれを記念したシンポジウムの開催を予定しており、iPS細胞研究のこれまでの歩みと今後の展望を広く発信していきたいと考えています。初代所長である山中伸弥教授（iPS細胞の生みの親、ノーベル賞受賞）、第二代所長である髙橋淳教授（パーキンソン病治療製品アムシェプリの開発を主導）の後を継ぎ、その重責を担うこととなりましたが、研究所のさらなる発展に向けて力を尽くしてまいります。

CiRAの重要な使命は、「リサーチ」と「アプリケーション」の両立にあります。研究成果を実際の医療へとつなげ、患者さんに届けることは極めて重要です。一方で、その基盤となる新たな発見や技術革新を生み出す研究活動を継続することも欠かせません。基礎研究と応用研究の双方を発展させることで、将来の医療を切り拓いていくことができると考えています。また、研究所の未来を支える若手研究者の育成も大切な課題です。研究者一人ひとりが自らの可能性を最大限に発揮し、多様なキャリアを築ける環境を整えることが、研究分野全体の発展につながります。若い世代が挑戦を続けられる研究環境づくりに力を注いでいきます。

こうした考え方は、千葉大学医学部が大切にしてきた理念とも通じるものがあります。CiRAでは設立当初よ

り、寄付者をご招待する「感謝の集い」や地方でのシンポジウム開催などを通じて寄付者との交流を深め、研究を社会全体で支える仕組みづくりを進めてきました。その経験は、大鳥精司病院長の多大なご努力もあり、千葉大学みらい医療基金の取り組みにも生かされているのではないかと思います。

今後も研究成果だけでなく、研究活動やその意義について積極的に発信し、社会との対話を深めてまいります。引き続きご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

## 帝京大学ちば総合医療センター　外科学　教授就任のご挨拶

首　藤　潔　彦（平3）

令和８年４月１日付をもちまして、帝京大学ちば総合医療センター外科教授を拝命いたしました。長年にわたりご指導ご厚情を賜りました千葉大学及び帝京大学関連の諸先生方に、心より深謝申し上げます。

私は平成３年（1991年）に千葉大学を卒業後、磯野可一教授のご教導のもと旧第二外科に入局いたしました。学生時代は準硬式野球に明け暮れ、医学的知識が必要最低限であった私に対し、「体力があれば大丈夫」と温い勧誘をいただき入局を決めた記憶があります。初期出張での幸手総合病院や鹿島労災病院では、外科の基礎はもとより社会人としての心得、医師としての考え方など多くのことを学びました。徳元伸行外科部長には初仲人を務めていただきました。時代の波により両施設とも統廃合されてしまったことは寂しい限りです。

当時のニゲ科は大所帯で、レンガ造りの医学部にある医局は40名近い人でにぎわっていました。私は岡住慎一先生（現 JCHO千葉病院長）が室長を務められていたレントゲン研究室に所属し、「肝腫瘍の血流動態」を研究テーマとして磯野教授のご助言を賜りながら努力賞的な学位記を取得しました。

後期出張の国保成東病院を経て平成15年（2003年）に千葉大学病院に帰局後は、落合武徳教授のもと食道癌治療の専門的修練を積みつつ、第二外科が食道胃腸外科に転生する頃には研究室を引率する立場になっていました。新しく就任された松原久裕教授のもとで、食道外科専門医として更なる経験を重ね、平成24年（2012年）に現在の帝京大学ちば総合医療センター外科に准教授として赴任しました。当院では当時、旧第一外科出身の幸田圭史教授（現 国保大網病院長）のもと、様々な背景の外科医達が仲良く熱く診療に励んでいました。私は上部消化管外科を引き継ぎましたが、全国的に普及しつつあった食道癌の胸腔鏡手術を導入すべく、ほぼ独学で習得を始めたのは「五十の手習い」でした。同時に、栄養学の大家であられる鍋谷圭宏先生（前 千葉県がんセンター副病院長）のご指導のもと、「栄養学的画像診断」を新たな研究テーマとし、現在も「六十の手習い」として取り組んでいます。



当院は内科系が東京大学、外科系が千葉大学を主な出身母体とし、自由で寛容な気風と気立てのよいコメディカルの協力のもと、地域密着型大学病院として診療に取り組んでいます。外科は清水宏明主任教授のもと、旧第一外科系の肝胆膵外科と旧第二外科系の食道胃腸外科の混成チームであり、「イチゲとニゲが仲良く共存する貴重なモデル施設」と自負しています。

昨今の外科医不足という厳しい現状はありますが、ちはら台地区への新規移転という大きな節目を控え、診療・教育・研究の更なる発展へと邁進する所存です。同窓会の諸先生方におかれましては、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

## 神戸大学大学院医学研究科　災害・救急医学分野　教授就任のご挨拶

大　島　　拓（平13）

この度、令和８年４月１日付で神戸大学大学院医学系研究科 外科系講座 災害・救急医学分野の教授に就任いたしました。私は平成13年（2001年）に千葉大学を卒業し、同年５月に千葉大学医学部附属病院救急部にて研修医としての一歩を踏み出しました。四半世紀にわたり育てていただいた母校の諸先輩方、そして同窓会の皆様に謹んでご報告申し上げます。

千葉大学の救急集中治療医学講座は、私が医学部に入学した1995年に平澤博之先生を初代教授として開講されました。私が医局に入局した2001年当時は、まさに講座が発展を遂げる時期にありました。その後、2006年には織田成人先生が第２代教授に就任され、ICUの拡充や、関連病院におけるドクターヘリの運用、救命



救急センターの開設にむけた準備など、診療体制が劇的に進化していく様子を、私は若手医師から中堅教員という立場で間近で経験させていただきました。2004年の大学院入学を契機に研究活動にも深く関わり、頭部外傷後の中枢神経再生に関する基礎研究にはじまり、臨床研究では重症患者の栄養療法に関する研究に力を注いで参りました。特に2014年からのスイス・ジュネーブ大学への研究留学では、間接熱量測定を用いた栄養療法の個別化を目指す研究に従事し、国際的な視点から救急・集中治療を見つめ直す貴重な機会を得ました。

現在の私があるのは、入局以来、救急・集中治療の真髄をご指導いただいた平澤博之先生、織田成人先生をはじめとする指導医の先生方や、忙しい救急診療や研究活動を共にした同僚や後輩のおかげです。臨床と研究をシームレスに繋ぐAcademic Critical Careの実践という千葉大学救急集中治療医学の理念は、私の医師としての基本姿勢となっております。また、神戸大学への転出にあたり、快く送り出してくださいました中田孝明教授にも、深く感謝を申し上げます。中田先生の下では准教授として、コロナ禍における診療活動、ECMO/DMATカーの開発、スポーツメディクスセンターでの活動、特定看護師の育成・指導、新設された災害治療学研究所での研究活動など、多くの挑戦的な取り組みに携わる機会をいただきました。

振り返れば、学生時代から研修医、そして救急科の教官として過ごした日々の中で、診療科の垣根を越えて、多くの千葉大学の先生方にご指導を賜りました。この場を借りて、お世話になったすべての先生方に、厚く御礼申し上げます。

千葉大学で培った精神と学びを大切にしながら、神戸の地において教育・研究・診療に尽力し、母校とのご縁を今後も大切に育んでまいりたいと考えております。身の引き締まる思いで神戸大学災害・救急医学講座の発展と、わが国の救急・集中治療医学の発展に微力ながら貢献してまいります。今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

## 東京女子医科大学病院　病院長就任のご挨拶

山　口　淳　一（平５）

このたび、令和８年４月１日付で東京女子医科大学病院病院長を拝命いたしました。千葉大学医学部を平成５年に卒業して以来、医師として30年以上にわたり循環器診療、教育、研究に携わってまいりました。卒業後すぐに東京女子医科大学循環器内科に入局し、関連施設での研修に加え、米国タフツ大学セントエリザベスメディカルセンターへの留学を経験、その後、東京女子医科大学循環器内科講師、低侵襲心血管病治療研究部門特任教授、循環器内科教授・基幹分野長を経て、本年より病院長を務めることとなりました。亥鼻の地で学び、多くの恩師や仲間に育てていただいた一人の卒業生として、この重責を担う機会をいただいたことに深い感謝と責任を感じております。

東京女子医科大学病院は、明治41年（1908年）の開院以来、建学の精神「医学の蘊奥を究め、兼ねて人格を陶冶し、社会に貢献する女性医人を育成する」と、大学の理念である「至誠と愛」のもと、我が国の医療を支える大学病院として歩みを重ねてまいりました。「至誠と愛」とは、きわめて誠実であること、そして人を慈しむ心を意味いたします。この理念は教育、研究、診療のあらゆる場面に息づいており、現在も本院の活動の礎となっています。私自身も、患者さんに寄り添う医療の大切さを学びながら診療を続けてまいりました。

近年、医療を取り巻く環境は大きく変化しています。少子高齢化の進展、医療技術の急速な発展、医療安全への社会的要請、さらには医療従事者の働き方改革など、大学病院に求められる役割はますます多様化しています。そのような時代だからこそ、私たちは患者中心の医療という原点を見失うことなく、安全で質の高い医療を提供し続けなければなりません。



病院長としては、高度先進医療のさらなる充実と医療安全の徹底に加え、次世代を担う医療人の育成、研究力の強化、地域医療機関との連携推進、そして透明性の高い病院運営に取り組んでまいります。また、患者さんから信頼され、職員が誇りを持って働くことのできる病院づくりを進めるとともに、本学が長年培ってきた「至誠と愛」の精神を未来へ継承してまいりたいと考えております。

千葉大学で学んだ「つねに真理を求める姿勢」と、東京女子医科大学で培われた「至誠と愛」の精神。その双方を胸に刻みながら、社会から信頼される大学病院の実現に全力を尽くしてまいります。今後とも、同窓生の皆様をはじめ関係各位のご指導、ご支援を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

## 千葉ろうさい病院　病院長就任のご挨拶

安　川　朋　久（昭62）

令和８年４月１日付で千葉労災病院長を拝命いたしました安川朋久と申します。

私は昭和62年に千葉大学医学部を卒業し、肺癌研究施設外科（現・呼吸器病態外科学）に入局いたしました。山口豊教授、藤澤武彦教授のご指導の下、千葉県救急医療センター（現・千葉県総合救急災害医療センター）、小田原市立病院、放射線医学総合研究所（現・QST病院）などで研鑽を積み、平成８年にPET研究により学位を取得いたしました。

平成11年４月に千葉労災病院へ赴任し、由佐俊和部長（昭和51年卒）のご指導の下、肺癌に対する胸腔鏡手術を中心に呼吸器外科診療に従事してまいりました。平成29年には副院長を拝命し、診療のみならず病院運営にも携わる機会をいただきました。

千葉労災病院は昭和40年、京葉工業地帯で働く方々の労働災害に対応し、勤労者医療を担う病院として設立されました。その後、独立行政法人化を契機として医療環境が大きく変化する中、深尾立院長（昭和39年卒）、河野陽一前々院長（昭和48年卒）をはじめとする諸先生方のご尽力により改革が進められ、地域の急性期基幹病院として発展してまいりました。

さらに、台風等の自然災害や新型コロナウイルス感染症への対応、人口減少・医療需要の変化など数々の困難に直面しながらも、岡本美孝前院長の卓越した指導の下、それらを乗り越え、現在では千葉県内のみならず全国にも誇り得る高機能病院へと成長したと自負しております。



現在、当院には初期研修医22名を含む約170名の医師が在籍し、年間約5,000件の手術、約8,000件の化学療法を実施しております。ロボット支援手術など先進的医療技術の導入を進めるとともに、外来化学療法の充実を図り、患者さんの生活の質に配慮したがん医療を推進しております。また、年間約6,000台の救急搬送を受け入れ、救命救急センター指定を目指して救急医療体制のさらなる強化に取り組んでおります。

教育面では、臨床研修指定病院として次世代の医師育成にも力を注いでおります。研修医採用では定員10名に対し80名を超える応募をいただき、マッチング第１希望者数では千葉県第１位となるなど、当院の教育体制と診療の質が高く評価されているものと考えております。

私自身、千葉大学で学び、多くの恩師や同門の先生方に育てていただきました。そのご恩に報いるべく、これまで築かれてきた伝統と信頼を大切にしながら、地域医療の発展と次世代医療人の育成に尽力してまいります。

同窓の先生方におかれましては、今後ともご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

## 聖隷佐倉市民病院　病院長就任のご挨拶

小　谷　俊　明（平６）

このたび、鈴木理志前院長の後任として、2026年１月付で聖隷佐倉市民病院の病院長を拝命いたしました小谷俊明と申します。平素よりゐのはな同窓会の諸先生方には大変お世話になっており、心より感謝申し上げます。

私は香川県高松市に生まれ、昭和63年に千葉大学へ入学し、西千葉の全学および医学部バドミントン部で汗を流しました。1994年（平成６年）に卒業し、山口豊教授主宰の肺外科、1997年には守屋秀繁教授主宰の整形外科へ入局いたしました。大学院では南昌平先生（現・当院名誉院長）の側弯症グループでご指導を賜り、2004年の修了と同時に当院へ赴任、人生の師である南先生から引き続きご指導いただけたことは大変幸運でした。

赴任したのは、国立佐倉病院から聖隷福祉事業団へ経営移譲され当院が新たに開院した日でした。当時の常勤医は20名に満たず、手術予定の患者さんにも逃げられる有様で、「人から必要とされない」辛さを痛感いたしました。組織の混乱の中、私たちが心掛けたのは「地域の患者さんと先生方を何より大切にする」ことでした。一軒一軒挨拶に歩き、顔の見える関係を築くことから始めました。



こうした取り組みが実を結び、今では多くの患者さんに頼っていただける病院へと発展いたしました。現在の強みは「地域連携」と「多職種連携」です。国際骨粗鬆症財団から日本で３番目となるGold評価を受けた骨粗鬆症リエゾンサービス（OLS）はその一例で、多職種が密に連携し、地域の医療機関と二人三脚で患者さんを支える体制が根付いております。

当院の母体である聖隷福祉事業団は、キリスト教に基づく「隣人愛」を理念とし、聖隷三方原病院が日本初の本格的ホスピスを開設するなど「開拓者精神」を大切にしています。温かい医療を提供し、新たな取り組みに挑

戦できるのは、日々現場を支えてくれるスタッフの尽力のおかげであり、素晴らしいスタッフに恵まれていることに深く感謝しております。

当院が充実した診療体制を維持できているのは、平成６年卒の自慢の同級生である大鳥精司教授が主宰する整形外科をはじめ、千葉大学の各教室から優秀な先生方をご派遣いただいているおかげです。日頃より患者さんをご紹介くださる同門の先生方のお力添えにも、深く感謝申し上げます。

若輩者ではございますが、育てていただいたご恩に報いるべく、先生方に安心して患者さんをお任せいただけるとともに、スタッフ自身が「ここで働きたい」と心から思える、笑顔あふれる病院を創り上げてまいります。今後とも変わらぬご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

## 令和８年度　千葉県ぁのはな会　総会

**日　　時**　令和８年10月３日（土）
**会　　場**　千葉大学医学部附属病院　３階　ガーネットホール

**総　　会**　16：00～16：30
**講 演 会**　16：30～18：10　進行　吉村　健佑（平19）

**テ ー マ**　「医師キャリアの多様化と、亥鼻から広がる進路開拓」
**学生発表**　座長：小野寺　淳 先生（平18）
**講 演 １**　木下翔太郎 先生（平26）「医師キャリアをとりまく社会情勢」
**講 演 ２**　鋪野　紀好 先生（平20）「地域医療教育学からみた医師キャリア」
**講 演 ３**　高林克日己 先生（昭50）「情報から医療に挑む」
**指定発言**　田邊　政裕 先生（昭49）
**特別発言**　三枝　一雄 先生（昭32）
**閉会挨拶**　黒木　春郎 先生（昭59）

**懇 親 会**　18：30～　レストランMOKU
参 加 費　卒後10年未満は無料／卒後10年以上は１万円

## 令和８年度　埼玉ぁのはな会　総会

**日　　時**　令和８年10月18日（日）
**会　　場**　中国料理東天紅　JACK大宮店
埼玉県さいたま市大宮区錦町682－２
大宮情報文化センター（JACK大宮）　18階
JR大宮駅西口徒歩３分　電話　048－647－0080
**総　　会**　11：30～12：00
**学術講演**　12：00～13：00
**演　　題**　「少子化、高度化の中での小児医療：首都隣接県で考えること」
**講　　師**　千葉大学大学院医学研究院　小児病態学教授
濱田　洋通 先生（平２）
**座　　長**　獨協医科大学埼玉医療センター　肝胆膵外科教授
吉富　秀幸 先生（平２）
**記念撮影**　13：00～13：10
**懇 親 会**　13：10～15：00
**会　　費**　12,000円（卒後６年までの会員は5,000円）

＊今年度は時間が繰り上がりました。
遠方の会員の皆様のご出席を心よりお待ち申し上げます。

# 役　員　紹　介

## 令和８年度　ゐのはな同窓会　新理事　就任挨拶

近畿ゐのはな同窓会　理事　**中　尾　照　逸**（昭50）

この度、ゐのはな同窓会の理事に就任いたしました中尾照逸と申します。歴史ある同窓会の運営に関わらせていただくこととなり、身の引き締まる思いです。

私は近畿ゐのはな同窓会の世話人として、昭和50年卒の同級生である故上田真喜子前会長と共に17年間運営に携わってきました。

近畿ゐのはな同窓会では会費は徴収せず、参加費から教授就任のお祝いを捻出してきました。事務局は苦しい運営を強いられて来ましたが、５年ほど前から本部より助成金を頂くことが出来るようになり、毎年教授就任者が出る最近の集いも無理なく運営出来ており、この助成金制度には地方の同窓会運営者の一人として、心から感謝しております。



今度は理事という立場で、近畿ゐのはな同窓会会員の生の声を同窓会本部に伝えることで、母校のさらなる発展と、同窓会の活性化に貢献してまいります。

浅学非才の身ではございますが、今後とも変わらぬご指導とご鞭撻を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

## 千葉大学支部ゐのはな会　会長就任のご挨拶

千葉大学支部ゐのはな会　会長　**諏訪園　　靖**（平６）

清涼の候、会員の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。このたび、伝統ある千葉大学支部ゐのはな会の会長を仰せつかりました、環境労働衛生学の諏訪園靖でございます。身に余る光栄であると同時に、その責任の重さに身が引き締まる思いです。前任の安西尚彦会長をはじめ、これまで本会の発展に多大なるご尽力を尽くされてきた諸先輩方、そして日頃より活動を支えてくださっている会員の皆様に、心より深く感謝申し上げます。

千葉大学支部ゐのはな会は、学術的な情報交換や会員相互の親睦を深めるだけでなく、常に千葉大学医学部・医学研究院の発展を支えるべく歩みを続けてきた歴史があります。さらに、白澤浩元会長により再びスタートした、「四金会」、すなわち、昭和26年の旧ゐのはな同窓会館の完成に際し、毎月第四金曜日の開催としてはじまった歴史を再び歩みだすことで、同窓の絆をさらに深めることを目指して取り組んでまいりました。現在は新しいゐのはな同窓会館や医学系総合研究棟で、医学研究院・附属病院勤務の仲間が第四金曜昼休みに年数回集まって交流しています。この歩みは、ひとえに歴代の役員の方々をはじめ、会員の皆様がたのご支援の賜物であり、ここに深く敬意と感謝の意を表します。



さて、急速に変化する現代社会において、同窓会が果たすべき役割や期待も、少しずつ形を変えつつあります。これからの時代を見据えたとき、世代や専門領域の垣根を越えたネットワークをさらに強靭となし、また次代を担う若手会員がより積極的に参画できるような、持続可能な組織づくりを進めていくことが求められていると思います。緑豊かな亥鼻の地で共に学び、共に語り合い、切磋琢磨した日々は、私たち一人ひとりの原点であり、人生の大きな財産です。さらに、母校との絆を深め、教育や研究活動へ貢献し、次世代を支える同窓会としての役割をより高めてまいりたいと考えております。

本支部のさらなる発展のため、誠心誠意、全力を尽くす所存でございます。皆様におかれましては、どうか今後とも変わらぬご厚情を賜りますよう、また、温かいご指導とご鞭撻を重ねてお願い申し上げます。

末筆ではございますが、皆様のますますのご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げ、就任の挨拶とさせていただきます。

**令和８年度総会において選出**

名誉会員

星野　　聡 氏（昭43）　　徳久　剛史 氏（昭48）

中澤　　肇 氏（昭52）

# 受　賞　の　挨　拶

## 瑞宝中綬章　受章のご挨拶

末　石　　眞（昭48）

令和８年春の叙勲にて瑞寶中綬章を拝受いたしましたことを報告いたします。

私は昭和48年千葉大学卒業後に旧第２内科に入局し、前年に冨岡玖夫先生が立ち上げたアレルギー膠原病の研究グループに属しました。旭中央病院に一年間、川鉄病院に一年間の出張をはさんで、同科で診療、研究を行いました。旧第２内科入局初めて担当した入院患者は気管支喘息で蛋白尿血尿もあり腎生検でIgA腎症と判明した患者でした。研究としては鳥居敏明先生のもとにラット好酸球よりのアリルサルファターゼ遊離機序について、さらに宮崎肺吸虫症（好酸球優位の胸水があります）の胸水中の好酸球遊走因子についてマウス腹腔洗浄液から得られる好酸球を用い、遊走因子の存在をみとめる研究をさせていただきました。その後に全身性エリテマトーデスで腎障害（ループス腎炎）のある患者の担当となったのをきっかけにループス腎炎の腎病理組織像について当時の国立療養所千葉東病院病理岡田正明先生、腎生検については同院内科土田弘基先生の指導により、臨床研究を行いました。血清中の補体C3の長期低下と腎組織の活動性所見が相関するがC4低下のみは相関少ないと報告できました。この間、杉山隆夫、松村竜太郎両先生にはともに膠原病患者に腎生検を行ないそれぞれその検討結果を報告していただきました。

昭和62年には、国立療養所下志津病院（現在の独立行政法人国立病院機構下志津病院）に赴任いたしました。同院は筋ジストロフィー、重症心身障害児者医療とともに一般医療を行っていました。赴任後にそれまで同院にはなかったリウマチ、膠原病患者の診療を開始し、リウマチ科も開くことができました。この間、千葉大学旧第２内科の岩本逸夫助教授、千葉大学アレルギー膠原病内科中島裕史教授からは多くのアレルギー、膠原病専門医を下志津病院に紹介いただき大変お世話になりました。

下志津病院赴任後には、シェーグレン症候群、関節リウマチなど膠原病リウマチ性疾患でどうしても継続する酷い全身痛、倦怠感のために日常生活が困難になる患者の存在を知り、線維筋痛症であると診断に至りました。同疾患は肉体的あるいは精神的ストレスによる中枢神経の過敏であろうとされており、半数以上の患者は台所仕事ができなくなり、湯舟に入っても全身痛、倦怠感悪化があるために入らなかったり、シャワーで済ます方がおり、大変驚きました。また完璧症が相関するようでした。薬剤投与などである程度の症状緩和がみられるものの症状消失例は大変少なく、発症誘因と思われる膠原病症状完全消失例、精神的ストレス消失例などわずかな症例のみでした。



近年、関節リウマチ、リウマチ性多発筋痛などでは関節エコー所見がその診断そのものにも活動性の評価にも重要となっております。定年近くになり下志津病院リウマチ科の担当先生に関節エコーを教えていただきました。

平成26年６月にて同院院長を退きました。その後は下志津病院と自宅近くの公立長生病院で非常勤医師としリウマチ科の診療をおこなっており、関節エコーは診療に大変訳立っております。また、旭中央病院でも検診医として勤務しています。

以上、医師としての長い勤務生活でしたが、その時々にお会いした患者さま、ご家族とのお付き合いも私の人生経験であり、これらの方々にありがとうございましたと述べたいと存じます。また、それぞれの勤務先の先生方はじめ、事務、看護、薬剤、検査そのほか多く方々にお世話いただきましたおかげで叙勲を受けることとなりました。ここに深く感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

## 令和８年春の叙勲を受けて

小　林　繁　樹（昭54）

このたび令和８年春、瑞宝小綬章叙勲の栄に浴しました。千葉県知事、厚生労働副大臣からの勲記・勲章の伝達式、皇居豊明殿での天皇陛下への拝謁などは、私の人生でまったく想定していない出来事でしたが、これも今まで御指導くださったゐのはな同窓会の先輩方、そして共に働いてきた多くの仲間とのお蔭と、改めて感謝の気持ちを強くした次第です。

私は、昭和54年に千葉大学医学部を卒業後、脳神経外科学教室に入局し、牧野博安教授、山浦晶教授をはじめとする多くの先生方の御指導を受けました。昭和61年より33年間千葉県救急医療センター（現千葉県総合救急災害医療センター）脳神経外科に勤務し、この間脳神経外科医として、脳血管障害や重症頭部外傷の急性期治療に従事いたしました。平成17年からの13年間はセンター長（のちに病院長）として、千葉県救急業務高



度化推進協議会、救急・災害医療連絡協議会、ドクターヘリ協議会などを通じて、千葉県の救急・災害医療体制の整備と発展に力を尽くしましたが、このことが今回の受賞につながったものと思います。東日本大震災発生時には、千葉県健康福祉部と連携しながら被災地への医療支援体制の構築に携わったことも、忘れることのできない経験です。

私の医師人生において特に大きなテーマであったのは、脳神経血管内治療を脳卒中の急性期治療に導入し、その発展と普及に努めることでありました。特に、脳動脈瘤に対する急性期コイル塞栓術が我が国に導入され始めた時代から、この治療法に取り組み、重症くも膜下出血患者の治療成績向上に微力ながら貢献できたことは大きな喜びです。また、PMDA（独立行政法人医薬品医療機器総合機構）専門委員や厚生労働省審議会専門委員として、脳神経血管内治療領域における医療機器承認審査に関与し、いわゆる「デバイスラグ」の改善に携わる機会を得ました。欧米で使用可能な医療機器を一日でも早く日本の患者さんに届けることは、医療の質向上のために重要な課題であり、その一端を担えたことを幸いに思っております。

現在は独立行政法人自動車事故対策機構　千葉療護センターにセンター長として勤務し、自動車事故による重度脳損傷患者の診療に携わっております。今回の受賞を励みとして、今後も、これまで培ってきた経験を少しでも社会に還元できるよう努めてまいりたいと考えております。引き続きの御指導をよろしくお願い申し上げます。

## 第14回日本医師会赤ひげ大賞を受賞して

前　川　裕　子（平18）

この度、第14回日本医師会赤ひげ大賞という名誉を賜り、身に余る光栄に存じます。まだ若輩者ゆえ、今後の地域医療を託されたような身の引き締まる思いがいたします。

私は2003年に本学へ３年次学士編入学し、2006年に卒業しました。本来は大学院進学のコースでしたが臨床への強い思いから進学を辞退しました。学生研究でお世話になった当時の薬理学中谷晴昭教授をはじめ、関係方々へご迷惑をおかけしたことをお詫びすると共に、私の思いを認めてくださった寛容さに心より感謝申し上げます。そのおかげで臨床に邁進し、2008年循環器内科へ入局、千葉県救急医療センターで石橋巌先生を始め素晴らしい先輩方のもとで循環器の基礎を叩き込んでいただきとても楽しく充実した１年間を過ごしました。思うところあり１年で医局を離れ、2010年に榊原記念病院に入職しました。将来は故郷の徳島で地域医療に携わるという青写真を描いていた私にとって、2011年３月11日の東日本大震災は医師人生の大きな転換点となりました。「今行かなければ後悔する」という衝動に突き動かされ、震災から３ヶ月後、退路を断って岩手県宮古市へ飛び込み、６月１日より岩手県立宮古病院で働き始めました。患者の持病の悪化、スタッフの心身疲労が顕在化する時期でした。勤務初日、土地鑑のない私に患者さんが「病院まで４時間かかった」と訴えて入院を希望され、後でスタッフから「１時間もかかりませんよ」と言われ苦笑いしたことも、忘れ難い思い出です。道路状況も悪く、苦しく不安な道のりだったのでしょう。一方で、循環器内科は高齢の常勤医師１名で外来のみという体制で、急性心筋梗塞患者を２時間かけて盛岡まで搬送する状況でした。深刻な医師不足を目の当たりにし、被災地支援だけでなくこの地域の循環器診療の復興も自分の役割だと考え「一粒の麦」になると決意しました。心疾患の急患や入院を一手に引き受け、カテーテル検査やペースメーカー手術を再開。２年後、岩手医科大学からの医師派遣が始まり、４～５人体制を維持できるまでになり、緊急治療体制確立、2015年には救急車からの12誘導心電図伝送システムも整備されました。



その傍ら、被災者の生活に寄り添いたいとの思いから、３年半にわたり仮設・復興住宅の巡回訪問に同行しました。さらに、地域包括的なケアを目指し2016年に多職種連携プロジェクト「心不全減らし隊」を発足しオリジナルの心不全手帳による指導や退院前の自宅訪問など取り組み、公民館に出向いて住民健康講座を行い地域の方々と触れ合いました。「前川先生の顔を見るとホッとする」「前川先生に診てもらえてよかった」という言葉をいただいたとき、やり甲斐と存在意義を実感しました。

ひたむきに寄り添い続けた宮古での12年間の宝物のような経験を糧に、故郷の徳島県三好市へ戻りました。2023年10月より徳島県立三好病院に勤務する傍ら、山あいの準無医地域である東祖谷での診療にも携わっています。今後も地域医療を担い、訪問診療にも注力していきたいと考えています。「暮らし」に寄り添い、一人でも多くの「ホッとした」という笑顔に出会える、そんな医師でありたいと願っています。今の私があるのは、人との出会いに恵まれたお陰です。お世話になったすべての方々に、深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 各地ゐのはな会だより

### 近畿ゐのはな会

**令和８年近畿ゐのはな会開催報告**

令和８年近畿ゐのはな会は、５月17日（日）13：00から昨年と同じくJR大阪駅近くのヒルトンプラザウエスト内のイルピノーロ梅田で開催し、近畿地方在住の会員17名と会員のご令嬢（医学生）の合わせて18名が出席されました。

伊豆敦子世話人（昭59）の司会のもと、本年２月16日に逝去された前会長の上田真喜子先生（昭50）のご冥福をお祈りして黙祷を捧げました。次いで会長の島正之（昭59）が開会の挨拶を述べ、大島拓先生（平13）が本年４月に神戸大学大学院医学系研究科外科系講座災害・救急医学分野の教授に就任されたことが紹介されました。

次いで玉置哲也先生（昭38）によるご発声で乾杯し、しばらく食事と歓談に花を咲かせた後、大島拓先生から自己紹介を兼ねて教授就任のご挨拶をいただき、花束と記念品の贈呈を行いました。

その後、参加者による近況報告に移りました。年配の先生方からは、現在もお元気に診療活動を続けておられるご様子や千葉大学医学部時代の思い出、卒後50年目でホームカミングデーに参加されたことなどをお話しいただきました。現役世代の会員からは現在取り組んでおられる診療や研究について熱く語っていただきました。この会に参加したことを契機に朝長毅世話人（昭59、医薬基盤・健康・栄養研究所）と中川誠太郎先生（平21、大阪大学大学院医学系研究科）が共同研究を開始したという、大変嬉しい報告もありました。

今年は昨年と同じイタリア料理店での開催でしたが、個室の落ち着いた雰囲気の中で楽しく懇談することができ、あっという間に時間が過ぎてしまいました。

最後に増村道雄先生（昭50）に閉会のご挨拶をいただいた後に、お店の前に全員集合して記念撮影を行い、散会となりました。

来年以降も同じ時期に開催する予定ですので、多くの方にご参加いただき、会員同士の交流を図っていきたいと思います。　（文責：島　正之）



**写真左から**

**前列**：朝長毅（昭59）、中尾照逸（昭50）、島正之（昭59）、大島拓（平13）
玉置哲也（昭38）、増村道雄（昭50）、福井博行（昭56）、伊豆敦子（昭59）

**後列**：中川誠太郎（平21）、矢野浩二朗（平11）、岡田厚（平21）、石井秀始（昭63）
永谷憲歳（平４）、髙田真理子（平13）、坂本陽子（平14）、野口貴志（平16）
野口志帆、猪野木雄太（平27）　（敬称略）

### お知らせ

ゐのはな同窓会事務局では、卒業年次別クラス名簿リスト、地域別会員リストおよび郵送用住所ラベルをご希望により作成いたします。詳細は同窓会事務室にお問い合せください。




# 四半世紀・半世紀卒業生の集い

## 千葉大学医学部ホームカミングデー

共催　千葉大学医学部
千葉大学医学部附属病院

**開催日**　令和8年11月1日(日)
14：00～

**場所**　千葉大学医学系総合研究棟3階第1講義室

**ご案内学年**　昭和51年卒業生（卒後50年）
平成13年卒業生（卒後25年）
平成23年卒業生（卒後15年）

千葉大学医学部
　卒後50年卒業生皆様
　卒後25年卒業生皆様
　卒後15年卒業生皆様

begin.continue

ゐのはな同窓会会長
吉原　俊雄

千葉大学医学部ゐのはな同窓会会員の皆様の日頃の御活躍には、同窓会として心より感謝申し上げます。つきましては、母校においてホームカミングデーを開催し、卒後50年（昭和51年卒）、卒後25年（平成13年卒）、卒後15年（平成23年卒）の会員皆様の日頃の御活躍への感謝の念をお伝えし、賞状等を贈呈いたしたいと存じます。
万障お繰り合わせのうえ、ご参集頂けましたら幸いです。

# クラス会

## 昭和49年卒（３本の指の会）クラス会

千葉大学に入学後、基礎及び専門についての医学を学んでいた頃、講義が滞ることがあり、クラスの有志が謄写版刷りのクラス会新聞「３本の指」を配布していたことがありました。卒業時期は異なっても、この仲間たちは、クラス会（３本の指の会）にて交流を深めています。しかし、タイから留学していたソームサラン先生は、帰国後には、クラス会に参加できていませんでした。このことから、坪井先生と衣川先生が幹事として、ソームサラン先生が来日する機会を選んで、クラス会を計画しました。２月26日の木曜日に開催の臨時クラス会でしたが、ソームサラン先生ご夫妻を含めて20名が参集し、東京都中央区のレストランを借り切って、美味しい料理を楽しむことができました。久しぶりの参加者も多く、歓談が続き、楽しいクラス会となりました。

また、１年３ケ月前の2024年11月に開催されたホームカミングデーには、ソームサラン先生は出席出来ず、卒後50年の記念メダル授与もできていない状態でしたので、今回のクラス会の為に、ゐのはな同窓会長の吉原先生から、記念メダルを御預かりさせていただき、このクラス会にて、幹事より授与させていただきました。

そして、歓談の終わりに、坪井幹事から、この日に参加していた田辺先生と登坂薫先生とが、叙勲されたことの紹介があり、散会となりました。

（文責：衣川直子、浅井隆善、坪井秀一）



**写真左から**

**前列**：渡辺順子、Somsranの御主人、Somsran Watanachotte、奥村俊子、唐澤直子、武藤高明

**後列**：北野慎一郎、坪井秀一、中村哲雄、野村恭子、登坂薫、衣川直子、浅井隆善、西野薫、田邊政裕、高原善治、五月女直樹、土佐純一、青柳博、石毛憲治、石川隆一

## 昭和60卒クラス会

### 昭和60年（1985）卒後40周年同窓会

昭和60年卒業生の卒後40周年にあたる同窓会を、令和８年（2026）３月７日「ホテル　ザ・マンハッタン」（千葉市美浜区）で開催いたしました。卒後40周年の記念イベントなので、1985年に40年プラスした2025年に開催したかったのですが、2025年内の開催には至らず何とか2025年度内開催にこぎ着けました。COVID-19の騒動の前までの数年間は学会の少ない７月頃に毎年開催し、20～30名程度参加していました。小穴慎二君から引き継いだ名簿をもとにメーリングリストを構築しメンテナンスしながら同窓会を開催して参りましたが、他の学年もそうだったと思いますがCOVID-19により中断を余儀なくされました。その間にメーリングリストを託していたサーバの閉鎖などもあり、今回の開催にはメーリングリストの再構築が必要でした。この間に定年退職や職場の異動などでメールアドレスが変更になっている同級生もいましたので、個人的なつながりを頼りに情報収集しました。同窓会のメーリングリストは可能な限り個人のメールアドレスを登録していただいた方が良いと実感しました。

何はともあれ総勢39名の参加を得て開催出来ました。われわれの学年は共通一次試験の初年度だったためか、学卒者なども多く年齢幅が広く多彩な経歴の持ち主が多いことが特徴だと思います。現役合格者は65歳で職場の定年退職の時期で、毎回出席していた鍋谷圭宏君は自身の送別会と重なり欠席となりました。一方、出席は出来

ませんでしたが卒後早くから渡米した川崎浩遠君からも連絡があり、来年は是非参加したいとメッセージがありました。参加者の最高齢は80にならんとしており、開会の挨拶を中信一君、締めの挨拶を堂垂伸治君の長老コンビにお願いし、楽しい時間を過ごしました。

今回を機会に毎年肩肘を張らずに緩く開催していきたいと思います。

この記事を読んだメーリングリストからのメールが届いていない昭和60年卒の同窓生は是非ご連絡ください。

（文責：古口德雄）



## 昭和61卒クラス会

令和８年３月21日に、我々昭和61年卒は10年ぶりに卒後40年同窓会を、海浜幕張のホテル・ザ・マンハッタンで開催いたしました。

当初なかなか名前が出てこなかったものの、すぐに45年前にタイムスリップし、あっという間の３時間を過ごすことができました。　（幹事・文責：林　偉明）



出席者は56名、**写真左から**

石田、古谷、中田、石井（花崎）、石井（内柴）、坪井、林（偉）、岩田（井上）、須藤（井上）、村上（康）、小室、佐々木（澤田）、芹澤、岡田（長竹）、菊地、高野、下田、蓑島（安西）、豊口、徳山、郷地、榎本、香川、遠藤、三上、畑、伊藤、佐藤（晴）、太田、貝沼、黒澤、鈴木（隆）、長谷川、結城、林（和）、渡辺（啓）、新藤、宮﨑（義）、五十嵐、川島、三浦、橋本、中澤、福長、渡辺（隆）、安達、稲垣、中村、夏木、櫻本、長門（与那覇）、渡辺（栄）、高谷、沢田、西脇、西堀

## 平成13年卒（95M）同窓会

令和８年４月５日（日曜日）、千葉大学亥鼻キャンパス内のカフェレストランMOKUにおいて、竹内啓善君の精神医学教室教授就任を祝う会を兼ねた平成13年卒（95M）同窓会が開催されました。心配された雨もあがり、美しい桜の木々が咲き誇るキャンパスに27名の同級生が集いました。

千葉県や東京都だけでなく、竹内君をお祝いするために関西や九州からも同級生が駆け付けてくれました。桜の木の下で写真撮影を行った後、11時半開宴となりました。竹内君との学生時代のエピソードに事欠かない堀口健太郎君そして中田恵美里さんの司会のもと宴は楽しく進行しました。まずは竹内君から教授就任にあたっての挨拶がありました。大学在学時代の多方面にわたるアチーブメントについて振り返るコメントが聞かれ、同級生一同、懐かしく、また抱腹絶倒の時間となりました。竹内君、抜群の観察力を活かした物真似、これからも期待しています。挨拶でも触れられていた精神医学教室の末広がりな発展、そして千葉県の医療への大いなる貢献を期待しています。

その後、呼吸器外科教授である鈴木秀海君の乾杯、千葉大JAZZ研の生演奏を経て、同級生１人１人からの竹内君へのメッセージと近況報告の時間となりました。働く地域や所属機関の属性は異なりますが、それぞれの言葉に皆、真剣に耳を傾けている様子が印象的でした。

約２年ぶりの同窓会でしたが、会えば瞬時に学生時代に戻れる関係性はとても貴重と感じます。お互いが、四半世紀という歳月を経ても変わらない、同時代を走り続ける仲間なのだと思います。環境や専門は１人１人異なりますが、それぞれの立場で奮闘していることを確認し、励まし合い、ねぎらい合う機会となりました。

一次会終了後、センシティタワー22階の甘太郎に場所を移し、二次会から登場した神谷一徳君にもご挨拶いただき、楽しい時間を過ごすことができました。

企画や準備を一手に引き受け、当日は主役以上に目立つ素晴らしい和装で登場した幹事の中村順一君、ありがとうございました。　（文責：長沢　崇）





**写真左から**

**１列目**：中島正之、齋木美恵、深谷佳孝、竹内啓善、加藤智規、長沢崇

**２列目**：藤川厚、櫻井隆之、甲斐昌也、柿崎桜、中田恵美里、髙田真理子、重田文子
青柳京子

**３列名**：中村順一、鈴木秀海、酒井望、大門道子、門平忠之、国司俊一、堀口健太郎
山田浩司、谷口俊文、岩澤真理、志賀隆、安田直史、山本達也

### 集合写真の氏名掲載につきまして

これまで、お写真には全員の氏名を掲載してまいりましたが、プライバシー保護の観点や、先生方の原稿執筆のご負担を考慮し、お写真と原稿のみのご提出でもお受けいたします。また従来通り氏名リストを添えていただく形でも問題ございません。ご事情に合わせた形式でご寄稿いただければ幸いです。

今後とも投稿のご協力賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

## 会　員　か　ら

# 医学部運動部OB活動報告
# 第59回全日本医師剣道大会静岡大会を主催して～交剣知愛～

笠　松　紀　雄（昭56）

私は昭和56年卒業、呼吸器内科入局を経て現在71歳で静岡県浜松市の老健施設で施設長として勤務しております。医学部学生時代は剣道部に属し大学やOBの先生方からの物心支援で大変お世話になりました。私は卒後40歳過ぎから剣道を本格的に再開し、60歳で教士７段称号を頂き、現在も現役で稽古を継続し可能な限り機会あるごと千葉亥鼻における剣道部における催事、新入生歓迎会/卒業生慰労会に参加し、若手医師へ仕事や家庭と剣道と両立した充実した人生（「生涯剣道」という剣道用語）の啓蒙やOB先生方との組織強化を努力してきました。

剣道は加齢が進んでも継続できるスポーツでもあり、剣道という「道」を修練する習い事でもあります。私のような医師剣道愛好家は全国に多数存在し、医師剣道家相互の親睦や若き医師剣道家の育成目的に設立された国内の団体が全日本医師剣道連盟であります。現在登録数338名、日ごろの修練を発揮する機会と「交剣知愛」（相手と剣/竹刀を交えること自体が会話となり友好を深めるという用語です）の場として、年１回全日本医師剣道大会が毎年各県持ち回りで行われてきました。この度、光栄あるその第59回大会長に私が指名され2026年６月13－14日静岡で本大会が盛大に行われました。これまで千葉大関係は第20回（1985年）綿貫重雄先生、第34回（1999年）山崎衛先生、第44回（2009年）遠山富也先生がそれぞれ大会長を立派に務められ、今回私が千葉大医学部関係で４回目であります。

今回は総勢120名（台湾からも５名）参加し２日間にわたり、個人戦や団体戦、その合間に稽古会など体力の続く限り行われました。また大会初日夜は親睦会（第２道場と称されます）が行われ、一生にわたる同年代ライバル達と昇段などの剣道報告や健康相談など楽しく交流を深めました。千葉大関係では金澤保先生（昭和55年卒）、私、新藤寛先生（昭和61年卒）、尾辻瑞人先生（平成２年卒）の４名が参加しました（毎年若手の参加が少なく悩みでもあります）。大会試合成績ですが、出身大学別対抗団体戦（前回千葉大優勝）では残念ながら予選リーグ突破できず。また年代別個人戦ではこれまで時々千葉大出身者に優勝など高成績者（新藤先生、尾辻先生）を出してきましたが、今回は入賞者が出ず、残念な結果となりました。来年度（鹿児島大会）に向けて皆１年間の稽古期間に突入します。

運営に際しては、審判員、大会運営役員の費用など物価高騰による経費の増加と最近の厳しい時勢を反映する協賛減少で毎年参加医師の参加費のみでの運営は難しく、全日本医師剣道連盟本部からの援助と関連OB会などからの賛助金/協賛費で行われています。今回大会長として可能な限り縮小したものを心がけましたが、経済的に苦戦を強いられ。今回千葉大医学部いのはな同窓会にもご協力を頂きました。深謝しております。









**写真左から**
尾辻瑞人（平２）、金澤保（昭55）
笠松紀雄（昭56）、新藤寛（昭61）

## あのはな同窓会支援
# 2026年度亥鼻祭開催のお知らせ

亥鼻祭実行委員会　医学部３年　**佐　藤　良　祐**

こんにちは。今年度亥鼻祭実行委員長を務めます、医学部３年の佐藤良祐と申します。長い歴史を引き継ぎ、昨年度まで亥鼻祭を開催できましたのも、あのはな会会員の皆様のご声援やご支援あってのことであり、心より感謝申し上げます。この同窓会誌では私の方から、今年度の亥鼻祭の紹介をさせていただきます。

亥鼻祭は今年度は10月31日（土）10時～17時、11月１日（日）10時～16時を予定しております。２日間での開催は2016年以来、実に10年ぶりのこととなります。

亥鼻祭は受験生に大学を紹介するオープンキャンパスとしての側面があります。特に受験生の中には、「他の医学部と迷っていたけど亥鼻祭にきて、千葉大学医学部の受験を決めた」という方が沢山います。今年の新入生の中にも亥鼻祭に来て千葉大医学部に憧れて入学してくれた学生もいます。そこで、今年度も受験相談やキャンパスツアーなどの企画を通じて受験生に向けたアピールを続け、よりレベルの高い学生が入学することに寄与する所存でございます。

また、オープンキャンパスという面に加えて、今年度の私たちの大きな目標として「地域の皆様に医療への関心を深めていただく」ことを目指しています。亥鼻祭は3000人の来場者数を誇る亥鼻キャンパス最大のイベントです。これまで多くの受験生にご来場いただいてきたのに加え、本年はより多くの地域の皆様にご来場いただき、医療への親しみを引き出してまいります。そこで本年の亥鼻祭は、医療系サークルの企画の他、昨年に引き続き心エコー体験や寄生虫の展示、先生方による講演会など、様々な先生方によるお力添えを得ながら、より分かりやすい、親しみやすい形での医療についての企画を準備しております。また、地域イベントへの参加を通じ、地域の皆様への広報活動を行いつつ、地域社会における亥鼻祭の存在感を高めてまいります。このような活動は、千葉大学医学部のイメージアップやブランディングにも繋がると確信しております。このような活動を通じて千葉大学を盛り上げるというミッションに向けて、委員会一同、全力で亥鼻祭の準備をしてまいります。

さて、このように亥鼻祭を盛り上げる活動ができますのも多くの方々からのご支援の賜物と存じます。そのような深いご理解とご支援に改めて感謝の意を申し上げます。今後とも、亥鼻祭並びに亥鼻キャンパスの発展と学生の充実を願い、変わらぬご支援とご愛顧を賜りますよう、お願い申し上げます。

また、今年度もあのはな会の会員の皆様からの個人寄付も受け付けております。ご寄付はこの９月のあのはな同窓会誌に同封いたします振り込み用紙からお振り込みしていただければと思います。

最後になりますが、亥鼻祭実行委員会サークル一丸となって、医療系の学園祭として最高のものを１年間かけて準備しております。皆様のご来場を委員一同、心よりお待ち申し上げてます。










## 学　長　表　彰

令和７年度　医学部受賞者

| 成績優秀賞 | 学術研究活動賞 |
|---|---|
| 野口　愛音（医６） | 海老原颯人（医５） |

（学年は令和８年３月現在）

## 献　体　の　集　い

令和8年度

# 献体の集い

令和8年
**10/30［金］**
10:00-11:45（開場9:30）

会場
アミュゼ柏 クリスタルホール
〒277-0005 千葉県柏市柏6-2-22

献体ってご存じですか？
死後、医学の発展のために自らの「身体」を
医学部に一定期間提供する制度です。
「献体の集い」は、献体された身体がどのように
医療に役立てられるか、
献体登録の方法や注意点などを中心に、
献体制度を広く学ぶイベントです。
献体に興味をもたれた方や、
既に献体登録されている方も是非ご参加ください！

無料
要参加登録
どなたでも
ご参加いただけます
先着200名様

特別講演

千葉大学医学部
呼吸器内科学 講師 伊狩 潤 先生

## 「年のせい」とあきらめないで！
## その息切れ・長引く咳の正体
～COPD・喘息と、知っておきたいシニアの感染症対策～



**参加申込み**

下記のURL又は二次元コードから事前に参加申込みをお願いいたします。
https://forms.cloud.microsoft/r/u5y6ztV68M
ハガキ、メールでもお申込みできます。お名前、メールアドレス、
電話番号、参加人数を明記し、下記問合せ先まで送付してください。

**お問合せ**

千葉大学亥鼻地区事務部総務課総務第一係　献体の集い担当
〒260-8670　千葉市中央区亥鼻1-8-1
TEL：043-222-7171（代表）043-226-2500（ダイヤルイン）
E-mail：inohana-soumu1@chiba-u.jp

**会場案内図**

駐車場はございません。
公共交通機関をご利用ください。
JR・東武線「柏駅」東口から徒歩7分




千葉大学 CHIBA UNIVERSITY
■主催：千葉大学医学部・千葉白菊会
■後援：千葉県・柏市・千葉大学ゐのはな同窓会

千葉白菊会 検索

# カンタベリー

杉　田　克　生（昭54）

医学を学んだ者には、血液循環を発見したのはイングランドのウィリアム・ハーヴィ（以下ハーヴィ）だと当然ながら信じてきている。ただし、古代ペルガモンの剣闘士の主任医師だったガレノスの肺循環の発見が見過ごされており、後にスペインの医学者ミカエル・セルベトゥスが同じ現象を再発見したことも見過ごされている。セルベトゥスと同時代のパドヴァ大学解剖学者レアルド・コロンボは、肺循環に加え心室の収縮・拡張現象を正確に説明し、肺静脈は空気ではなく血液だけを運んでいることを見出している。ハーヴィはそれらの知見と彼独自の実験から血液が循環していると推測し発表したが、動脈から静脈の間をつなぐ機構解明にはイタリアボローニャの解剖学者マルチェッロ・マルピギーの毛細血管発見を待つことになる。本来パラダイムシフトとされる画期的理論も、それが発表された時代の前後を知ることで理解が一層深まる。



写真　ハーヴィの銅像

ハーヴィは1578年４月１日カンタベリーに近いイギリス南部の港町フォークストンに生まれた。学業優秀でケンブリッジ大学のゴンビル・キーズ・カレッジに在籍し、1597年Bachelor of Arts（BA）を取得した後、1598年秋にイタリアパドヴァ大学へ入学した。1602年４月25日医学・哲学博士の学位を得て、イングランドへ帰国した。当時カトリック教会はハーヴィのようなプロテスタントには博士号は授与しなかったが、大学は正式な授与式とは別にシグムント伯の宮殿で授与式を行い、神聖ローマ帝国皇帝ルドルフ２世ではなく伯爵の署名でハーヴィに免状が与えられた。帰国後ケンブリッジ大学でも学位を受けた。ハーヴィはアリストテレス的目的論に沿って生命の“中心”は心臓と考えており、動物を用いた循環生理学への道を推し進めた。その後のロンドンでの活躍などは以前紹介したので、割愛する。

郷里フォークストン市内にはドーヴァー海峡を見下ろす丘公園があり、そこには海岸を向いて立つハーヴィの銅像がある。右手を左胸に当て、左手に心臓を持っている（写真）。

千葉大学ゐのはな同窓会 会員の皆様へ
「会員総合補償制度」のご案内
保険期間：2026年3月1日午後4時～2027年3月1日午後4時（中途加入随時受付）

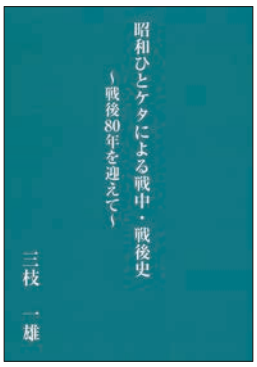

支払限度額が拡大！医療業務中の万一に備えて
医師賠償責任保険（勤務医向け）
医療の遂行に起因して、万一患者の身体に障害を与えてしまった場合(死亡を含む)にその法律上の損害賠償責任のご負担を補償します。出張診療中も監督責任を問われた場合も対象。
対人１事故につき支払限度額 3 億円（保険期間中９億円）Z3 タイプ登場
≪お問合せ先・取扱代理店≫
PIONEER 株式会社パイオニア
Tel 0120-36-8442　Fax 0120-36-1061
https://www.pioneerltd.com/
産業医等活動保険(任意付帯オプション)も取扱中。
この広告は医師賠償責任保険、産業医等活動保険の概要についてご紹介したものです。保険の内容はパンフレットでご確認ください。また、ご加入にあたっては、必ず重要事項説明をよくお読みください。詳細は団体代表者の方にお渡ししてあります保険約款および特約によりますが、ご不明な点は取扱代理店または引受保険会社へお尋ねください。
【引受保険会社】東京海上日動火災保険株式会社（担当部）医療・福祉法人部　Tel: 03-3515-4143（平日 9:00～17:00）　2026年3月 25TC-000287

# 著　書　紹　介

**三枝一雄（昭32）著、投稿者：下条直樹（昭54）**

## 『昭和ひとケタによる戦中・戦後史　～戦後80年を迎えて～』

三陽メディア（株）　定価　3,000円（ねのはな同窓の会員の方については無料でお分けいただけるそうです）
令和７（2025）年８月発行　292頁




本書は、千葉大学医学部昭和32年卒、第一外科教室OBである、三枝一雄先生が「戦後70年を迎えて」との題で平成27（2015）年から千葉県医師会雑誌に寄稿された満州事変から太平洋戦争終結までの連載に、戦後編を加えて一冊にまとめて発刊された書籍です。最近の著書紹介は著者ご本人によるものが主なようですが、今回はこの本を拝読して是非とも同窓会会員の先生方にご紹介したいと考えた一読者による紹介です。

令和４（2022）年からのロシア・ウクライナ戦争、令和５年からのイスラエル・ハマス／ガザ戦争のみならず、ミャンマー内戦、スーダン内戦などと世界各地で大規模な戦争・紛争が多発しています。国際平和を守るべく設立された国際連合も安全保障理事会をはじめ、深刻な機能不全に直面し、これらの戦争・紛争は終わりが見えません。戦後長く平和を保ってきた我が国も、中国・台湾問題をはじめとして安全保障上の問題に向かい合う機会が増えてきています。戦後80年になりますが、長く争いの要因となってきた課題が戦後も根本的には解決されず、現在まで繋がっているように感じます。「歴史は繰り返す」とも、「歴史は繰り返さないが、韻を踏む」といもいわれますが、戦争や紛争に繋がるいくつかの重要な因子は歴史の中で変わらないのかもしれません。今こそ、感情のみに流されず、日本および世界の動きを客観的・批判的に見る姿勢を持つことが強く求められる時代になりつつあるのではないでしょうか。戦後、歴史史観は変遷を経てきていますが、公的な政府の史観とは別に、個々人が日本の歩んできた道を振り返り、どのような将来を作ろうとするのかを考えることは極めて重要なことだと思います。

戦後80年を過ぎ、太平洋戦争を経験したご本人から直接にお話を伺う機会は少なくなってきています。本書は、戦前・終戦・戦後の出来事を自身で経験し、人の命を守るという医師の道を歩んできた同窓の先輩が、多くの文献にあたりながらまとめられた戦中・戦後史であり、是非多くの同窓会員、とくに若い世代に手にとって欲しい著作と思います。

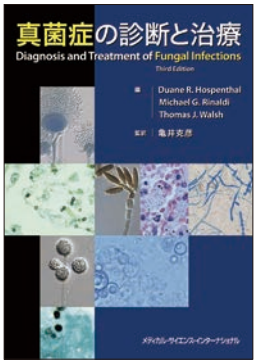
（昭和54年卒　下条直樹）

ご希望の方は、下記までご連絡ください。
連絡先：〒293-0012 千葉県富津市青木1641
医療法人社団三友会　三枝病院
※本著書は亥鼻分館にも寄贈されております。

**亀井克彦（昭56）監訳**

## 『真菌症の診断と治療：メディカルサイエンスインターナショナル（MEDSi）』

メディカル・サイエンス・インターナショナル　定価　12,000円（税別）




真菌症は真菌（いわゆるカビ）による感染症です。一般に「水虫」が有名ですが、実際には稀ならず全身感染を引き起こします。特に血流感染や肺や脳、肝などの感染が高頻度で、その診断の難しさと致死率の高さは折り紙付きです。世界各国で増加を続けており、欧米では多くの専門家が活躍していますが、なぜか我が国では専門家が極端に少ないばかりか、教科書も存在していませんでした。医学部教育の面では、千葉大には真菌医学研究センターがあるため充実していますがこれはきわめて例外的で、ほとんどの大学では系統だった教育が行われていません。これでは専門家の育成は難しいと懸念していた時、欧米で真菌症の定本とされるDiagnosis and Treatment of Fungal Infectious 3rd ed.（Springer社）を翻訳する機会を頂きました。本書は、この領域の世界的なリーダーであるThomas. J. Walshら３名が監修し、世界各国の専門家が分担して執筆したテキストです。内容は真菌による感染症を基礎（微生物学、免疫学など）～臨床まで詳細に解説されており、臨床医や基礎研究者など幅広い読者層を対象としています。疾患では全身の深部臓器の感染症

はもちろん、皮膚科領域の真菌症にもしっかり対応しており、まさにあらゆる真菌症を網羅しているといっても良いでしょう。もちろん、近年、各国で深刻な院内感染を引き起こしている多剤耐性菌 *Candida auris* や、コクシジオイデス症などの地域流行型真菌症（輸入真菌症）、ニューモシスチス肺炎など、多彩な疾患が取り上げられており、さすがと感じました。翻訳はそれぞれの領域で我が国の第一人者の先生方にお願いしましたが、千葉大学からは真菌医学研究センターの渡辺　哲先生、附属病院感染症内科の谷口俊文先生にも参加していただきました。真菌症というとやや特殊な疾患という印象をお持ちかも知れませんが、実際には呼吸器内科、血液内科、救急部、感染症内科、外科、皮膚科、小児科など多くの診療科が悩まされています。我が国で初めて登場したこの真菌症の教科書が、臨床の先生方はもちろんのこと、微生物や免疫、病理学など基礎医学領域を含めた多くの先生方のお役に立てばと考えています。

**松永正訓（昭62）著**

## 『赤ちゃんにメスを入れる　知られざる小児外科の世界』

晶文社　定価　1,800円（税別）




私の25冊目の著作です。

小児外科医ですと自己紹介すると、「ええと、頭を打ったときに診てくれるお医者さんですか」とか、「交通事故の怪我を治すんですね」とか言われたりします。同窓のみなさまは小児外科の疾患を十分にご存じだと思いますが、世間的には小児外科という学問は、本当に知られていないと思います。

小児外科の特徴は３つあります。

まず１つ目。小児外科は扱う臓器の種類がとても多いです。内臓はほとんどすべて手術します。触れないのは「心臓」「脳」「骨」だけです。

２つ目。赤ちゃんを含めて子どもというのは発展途上の身体なので、10年後、20年後、50年後のことまで考えて手術をするということです。病気を治すことはもちろん大前提ですが、その手術した体で何十年も生きていくことを考えて「機能」を作る手術をします。これは言うのはかんたんですが、実際にはけっこう難しいのです。

３つ目は、小児外科で取り扱う病気の大半が、先天的な発生異常に基づく疾患ということです。これは大人の外科と全く異なります。小児外科で治療する疾患の大半は、人体の発生のプログラムのエラーに基づく先天異常で、小児がんにおいても成人とは異なり、発生プログラムの異常が発がんの理由です。小児外科学という学問は、人体発生学や発生生物学と密接に関与しています。

本書において、小児外科学という学問の魅力を多くの人に紹介したいと思っています。ただ単に小児外科学の教科書のようになってはつまらないので、発生学との接点を重視しながら、なぜこういう疾患の子が生まれ、どういう手術をすれば治るのかを述べました。

将来医師になってみたい若い人、そして初期研修中の医師にぜひ読んでほしいです。また、医学にまったく関係ない人でも、「小児外科」と聞いて、それって一体何だろうと少しでも興味を持った方々にも本書を手に取ってもらいたいと思っています。このため、医療エッセイの要素も加えました。

本書は専門家向けの教科書ではないので、ある疾患についてすべてのことは敢えて説明していません。読みやすさを優先し、その疾患の本質を知っていただくために書かれています。特に診断方法に関しては、すべてを説明するということはしていません。また、専門用語の使用は最低限とし、分かりやすさを心掛けました。ただしそれは、レベルを落とすということではありません。

おもしろい本に仕上がったと思います。同窓のみなさまもぜひ、応援してください。

### 会費納入のお願い<br>口座振替のおすすめ

会報と共に会費納入のお願い（払込取扱票）が同封されていた方は、ゐのはな同窓会費（5,000円）の納入をお願い致します。

**会費納入には口座振替が便利です。**

口座振替申し込み用紙は同窓会事務局までご請求ください。

TEL：043－202－3750
e-mail：info@inohana.jp

＊他金融機関からゆうちょ銀行への振込先
〇一九（ゼロイチキュウ）店（019）
当座0143947

松永正訓（昭62）著

## 『性別違和に生まれて　父と子で綴った23年』

中央公論新社　定価　2,000円（税別）




「すべての幸せな家庭は似ている。不幸な家庭は、それぞれ異なる理由で不幸である」（レフ・トルストイ）という言葉があります。

私は長く開業医をやる中で、この言葉の少なくとも後半は真実だと思うようになりました。不幸な家庭という言い方は失礼かもしれませんが、困難を抱えた家族は多いです。そしてその理由はさまざまです。

「朝、起きられない」「すぐにお腹が痛くなる」「身体がだるくてしんどい」。はっきりした病名が付けられない子がいます。そういう子どもに詳しく話を聞いていくと、学校での「いじめ」が明らかになったりすることがあります。

また、そうした子は不登校に移行したりします。あるいはすでに数年間、不登校という状態でうちのクリニックを初診で受診することもあります。

親子関係がうまくいっていない家庭もあります。父親が子どもに暴力を振い、その外傷の治療のためにやってくる母子もいます。児童相談所が介入し、子どもは一時保護になったりすることもあります。

私の家庭の中にも困難があります。娘は現在、23歳。性自認は「女」ではありません。性別違和という悩みを抱えています。

学ランに身を包み中学校に通いましたが、周囲との関係はうまくいきませんでした。学校生活に行き詰まり、パニック症を発症しました。電車に乗ることができないため、高校は中退します。やがて絶望感から、うつになりました。最も苦しんだのは、15歳・16歳・17歳のときだったと思います。

10代の娘はどうやって生きていけばいいか、自分では道を切り開けませんでした。だから、私と妻で一生懸命に考えて、娘と相談しながら人生のレールを示しました。

そして、高卒認定試験を受け、自学自習で千葉大学教育学部に合格しました。しかしそこでも挫折します。再び退学し、通信制の芸術大学に進みます。そこで絵を学び、ようやく「卒業」というゴールに辿り着きました。就職はできませんでしたが、何とか（文字通り）生き延び、現在は在宅で絵を描く仕事を細々としています。

私は本書において極めて個人的な体験を語ろうと思います。でもその中には、生きづらさを抱えた子どもと家族にとって、生きる勇気になるものが含まれていると信じます。また、23歳の娘に、そのときどきの心情を振り返って手記を書いてもらい、ここに残すことにしました。性的マイノリティーとして生きるとはどういうことなのか、詳細にその苦悩を語ってもらいました。

私にとってとても大事な本になりました。同窓の皆様もぜひ手に取ってみてください。

## 令和８年度　千葉大学医師会　日本医師会認定産業医研修会
## 基礎（後期・実地）・生涯（更新・実地）開催のご案内

**日　　時**：令和８年11月11日（水）18時～20時

**場　　所**：千葉大学医学部・医学系総合研究棟３階　第１講義室

**定　　員**：70名　※定員になり次第締め切ります。

**受 講 料**：千葉大学医師会員　無料
非会員：2,000円（当日、現金のみ）

**申込方法**：下記URLまたは二次元コードよりお申込みください。
申込URL：https://forms.gle/p18fg33GGJKNuzp78
※従来通りメールやfax、お電話でも受付致します。

**※お願い※**
MAMIS（医師会　会員情報システム）のマイページ登録がお済みでない方は下記より登録をお願い致します。
https://mamis.med.or.jp/register/

**申込・問合せ：千葉大学医師会　事務局（https://chibamed.jp/）**
Tel：043－202－3755　Fax：043－202－3757　e-mail：ishikai@c-med.org

# 議　事　要　旨

## 令和８年度　第１回理事会議事要旨抜粋

**日　時**：令和８年４月23日（木）　午後６時より
**場　所**：ステーションコンファレンス東京503A
**出席者**：
吉原俊雄（会長）
白澤　浩（副会長）、安西尚彦（副会長）
伊藤達雄（参与）、栗原正利（参与）
吉川廣和（顧問）
岩倉弘毅（会計監事）、幡野雅彦（会計監事）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 赤倉功一郎 | 石川詔雄 | 伊藤彰一 | 北野慎一郎 |
| 諏訪敏一 | 諏訪園靖 | 髙橋宏和 | 田邊政裕 |
| 鶴田好孝 | 中田孝明 | 平澤　晃 | 古屋好美 |
| 星野　聡 | 松前孝幸 | 宮本恒彦 | 横須賀忠 |

（敬称略）

吉原俊雄会長が議長となり協議が進められた。

**議題**

**１．報告事項**

**１）学生説明会（医６）でのボールペン配布について**

伊藤彰一理事より学生が卒業後も同窓会に積極的に関与してもらうため、千葉大学のロゴマークを入れたボールペンの配布が提案され、11月３日のOSCE後の説明会時に配布を予定しているとの報告がされた。

**２．協議事項**

**１）名誉会員の推薦について**

吉原俊雄会長より資料に基づき栃木県ゐのはな会、大学ゐのはな会、山梨ゐのはな会から推薦された候補者が推薦基準を満たしていると説明があり３名を名誉会員に推挙することが承認された。

**２）令和７年度決算報告**

**⑴　決算報告**

伊藤彰一理事より資料に基づき令和７年度の決算報告があり、会費収入が昨年度より減少、寄附金は６件の団体および個人から寄付があったことが説明された。

支出については総会が亥鼻キャンパス内での開催のため会場費の負担がなかった。支部活性化事業費は、９支部に支援し、同窓サポートプロジェクト経費などが説明され、承認された。

**⑵　監査報告**

岩倉弘毅会計監事と幡野雅彦会計監事より、令和７年度の会計監査を実施したところ適正であることが報告され承認された。

**３）令和８年度事業計画**

諏訪園靖理事より資料に基づき令和８年度の事業計画の説明があり、了承された。

**４）令和８年度予算案**

伊藤彰一理事より資料に基づき令和８年度の予算について説明があり、収入については、会費収入を昨年度より減額。支出については、今年度より理事会費と委員会費をまとめて計上、会報・会誌印刷費は会報のレイアウト変更により増額、同窓サポートプロジェクト増額などが説明され、承認された。

会費収入減少の主な原因として、郵便振替システムの問題が議論され、ネットバンキングの周知はしているが、振込票の欄外に記載されていることから、振込票内部に「ネット振込は上記＊参照」を追記することで合意された。

**５）令和８年度役員について**

吉原俊雄会長より資料に基づき新役員について説明があり、承認された。また、新理事の山梨ゐのはな会　古屋好美氏（昭53）からご挨拶いただいた。

学年幹事の中で学長、附属病院長が担当している学年があるので、再検討が必要な学年幹事については事務局までご連絡をいただくこととなった。

**６）総会について**

吉原俊雄会長から総会案内について説明があり、講演等について東京ゐのはな会会長の岡本和久理事と相談しながら進めていること、東京ゐのはな会は15時から開始することが報告された。また、総会の担当については、大学、東京、千葉県の各ゐのはな会が順番に担当することの認識合わせをし、次回（令和９年）の総会は千葉県ゐのはな会との合同開催になることが確認された。

**７）その他**

理事会にて伊藤達雄参与から参与退任の挨拶があったが、理事会終了時に、今後様々なご意見をうかがうことも踏まえ、ご本人および会長・副会長の合議の上、顧問就任をお願いしご承諾いただいた。

## 令和８年度　ゐのはな同窓会総会議事要旨

**日　時**：令和８年６月13日（土）15時30分より
**場　所**：銀座アスター　お茶の水賓館
**出席者**：118名、その他（事務局員７名）
**委任状**：549名

白澤浩副会長の辞により開会となり、安西尚彦副会長の司会のもと、まず物故者115名に黙祷を捧げた。吉原俊雄会長の挨拶の後、議事が進められた。

**議事**

**⑴　名誉会員の推薦について**

吉原会長より内規に基づき推挙された３名の会員について説明があり承認された。（11面に掲載）

**⑵　年次活動について（報告事項）**

**①　庶務部報告**

諏訪園靖理事より令和７年度の各会議開催が報告された。

② 事業部報告

諏訪園理事より、同窓会賞の授与、同窓会報の発行、同窓サポートプロジェクト、メモリアル事業、各種助成について報告された。

⑶ 令和７年度決算

① 決算報告

伊藤彰一理事より、収入のうち会費は昨年度より減少、寄附金は６件の団体および個人から寄付があった。支出は理事会、委員会等で予算以内、備品費は事務室のパソコン買い替えのため、支部活性化事業費は、９支部に支援、同窓サポートプロジェクト経費などが説明され、承認された。

② 監査報告

幡野雅彦会計監事より、令和７年度の会計監査を実施したところ適正であると説明され、承認された。

⑷ 令和８年度事業計画

諏訪園理事より令和７年度とほぼ同等の事業計画であるとの説明があり承認された。

⑸ 令和８年度予算案

伊藤彰一理事より令和８年度の予算案について、収入は前年より減額。支出は理事会費と委員会費をまとめて計上、会報・会誌印刷費、同窓サポートプロジェクトを増額する事などが説明され、承認された。

⑹ 令和８年度役員

吉原会長より、前年度役員の再任、新理事が山梨ゐのはな会、近畿ゐのはな会から推薦があり、承認された。

ゐのはな同窓会賞表彰式

安西副会長の司会により、横須賀忠理事から功労賞受賞者奥村康氏について、吉原会長により社会貢献賞受賞者笠貫宏氏についてそれぞれ紹介され、表彰式が行われた。吉原会長より表彰盾と副賞が授与された。

特別顧問挨拶（ビデオメッセージ）

安西副会長の紹介で、三木隆司千葉大学大学院医学研究院長・医学部長と大鳥精司千葉大学医学部附属病院長よりビデオメッセージをいただいた。

講演

座長吉村健佑氏の紹介で「2030年、2040年に向けて、医療はどうなる？医療政策、社会変化、医師の意識変化を踏まえて」と題して松本晴樹氏による講演が行われ、その後、幡野会計監事の辞により閉会された。

令和７年度決算報告

収入の部

| 款　項　目 | 予算額（円） | 決算額（円） | 対予算額（円） |
|---|---|---|---|
| 会　費　等 | 18,450,000 | 15,297,000 | －3,153,000 |
| 事業収入（註１） | 7,300,000 | 7,853,651 | 553,651 |
| 他会計より受入 | 1,000 | 1,605 | 605 |
| 寄　付　金 | 250,000 | 964,154 | 714,154 |
| 基金より取崩し（註２） | 0 | 0 | 0 |
| 雑　収　入 | 16,000 | 9,145 | －6,855 |
| 前年度繰越金受入 | 12,939,825 | 12,939,825 | |
| 収入合計 | 38,956,825 | 37,065,380 | －1,891,445 |

支出の部

| 款項目（節） | 予算額（円） | 決算額（円） | 対予算額（円） |
|---|---|---|---|
| 総　務　費（註３） | 15,150,000 | 11,016,136 | －4,133,864 |
| 事　業　費（註４） | 16,170,000 | 11,503,382 | －4,666,618 |
| 事業税等 | 1,700,000 | 1,543,100 | －156,900 |
| 予　備　費 | 5,836,825 | 642,050 | －5,194,775 |
| 積　立　金 | 100,000 | 305,000 | 205,000 |
| 次期繰越金 | | 12,055,712 | 12,055,712 |
| 支出合計 | 38,956,825 | 37,065,380 | －1,891,445 |

令和８年度予算

収入の部

| 款　項　目 | 予算額（円） |
|---|---|
| 会　費　等 | 17,400,000 |
| 事業収入（註１） | 7,300,000 |
| 他会計より受入 | 2,000 |
| 寄　付　金 | 250,000 |
| 基金より取崩し（註２） | 0 |
| 雑　収　入 | 12,000 |
| （当期収入計） | 24,964,000 |
| 前年度繰越金受入 | 12,055,712 |
| 収入合計 | 37,019,712 |

支出の部

| 款項目（節） | 予算額（円） |
|---|---|
| 総　務　費（註３） | 14,850,000 |
| 事　業　費（註４） | 17,520,000 |
| 事業税等 | 1,700,000 |
| 予　備　費 | 2,849,712 |
| 積　立　金 | 100,000 |
| 次期繰越金 | |
| 支出合計 | 37,019,712 |

註１～４：収入、支出の主要細目等

| | | 款　項　目 | | 令和８年度予算 | 令和７年度予算 |
|---|---|---|---|---|---|
| 収入の部 | （註１） | 事業収入 | 会員総合補償制度集金事務費 | 7,300,000 | 7,300,000 |
| | （註２） | 基金より取り崩し | 同窓会基金よりメモリアル事業に充当 | 0 | 0 |
| 支出の部 | （註３） | 総務費 | 会議費 | 3,200,000 | 3,300,000 |
| | | | 人件費 | 7,700,000 | 7,700,000 |
| | | | 法定福利費 | 1,200,000 | 1,200,000 |
| | | | その他 | 2,750,000 | 2,950,000 |
| | （註４） | 事業費 | 会報・会誌 | 6,450,000 | 5,700,000 |
| | | | 学事奨励　・ゐのはな賞 | 600,000 | 600,000 |
| | | | ・猪之鼻奨学会 | 400,000 | 400,000 |
| | | | 各種助成　・附属図書館 | 800,000 | 800,000 |
| | | | ・白衣式 | 800,000 | 800,000 |
| | | | ・国際交流支援 | 100,000 | 100,000 |
| | | | ・ちばBCRC支援 | 300,000 | 300,000 |
| | | | ・学生活動助成金 | 300,000 | 400,000 |
| | | | ・留学生交流支援費 | 100,000 | 100,000 |
| | | | ・白菊会 | 200,000 | 200,000 |
| | | | ・支部 | 4,100,000 | 4,100,000 |
| | | | ・卒業祝い金 | 500,000 | 500,000 |
| | | | ・同窓サポートプロジェクト | 1,800,000 | 1,400,000 |
| | | | ・IT関連事業費 | 1,000,000 | 500,000 |
| | | | メモリアル事業等 | 0 | 0 |
| | | | その他 | 70,000 | 70,000 |

## お　く　や　み

有田　文章（昭27）
小沢　昭司（昭27）
石神　一良（昭30）
桑原　　久（昭31）
布川　武男（昭32）
真田　孝三（昭33）
外丸　和弘（昭33）
永田　一郎（昭35）
秋元　富夫（昭36）
白石　博康（昭36）
谷合　　明（昭36）
山口　正敏（昭39）
田中　壽一（昭43）
星山　圭鉱（昭44）
吉田　孝宣（昭46）
渡辺　直大（三重県医大・昭46）
清川　輝雄（昭48）
嘉川　宗秀（昭52）
榊原　　誠（昭55）
関　　紳一（昭55）
有留　　寛（昭63）
西　　真歩（平５）
町野　達也（平６）
本田　昌弘（平10）

**お詫びと訂正**

前号（200号）の訃報欄に南出正順先生（昭59）とありますが、先生はご健在でご活躍中ですので、訂正してお詫びいたします。

## ゐのはな同窓会賞受賞候補者募集要項

第32回（2027年度）ゐのはな同窓会賞の受賞候補者を下記により募集いたします。

**１．受賞対象者**
①**社会貢献賞**　本会員で、医療活動の顕著な業績により、社会に高い貢献をした個人またはグループ
②**功　労　賞**　医療および広く文化の各領域において、千葉大学医学部および千葉大学ゐのはな同窓会に多大の貢献をした会員

**２．表　彰**
①**社会貢献賞**（２件以内）　盾および賞金（総額20万円以内）を贈呈します。
②**功　労　賞**（２件以内）　盾および賞金（総額20万円以内）を贈呈します。

**３．応募方法**
所定の申請用紙により、2026年12月１日～2027年１月31日までに申請してください。

**４．受賞者の決定**
常任理事会の議を経て、会長が行います。
審査結果は2027年５月中旬頃までに各申請者に通知すると共に、ゐのはな同窓会報に掲載します。

**５．問い合わせおよび申請用紙請求先**
千葉大学医学部内、ゐのはな同窓会事務室
申請用紙は同窓会ホームページよりダウンロードすることが出来ます。

## 編集後記

ゐのはな同窓会報第201号をご覧頂きまして有難うございます。また、皆様のお手元に無事に同窓会報をお届けするにあたり、ご尽力頂きました編集委員の先生方や同窓会事務の方々に御礼申し上げます。

昨年のことになりますが、私の所属する平成17年卒の卒後20周年同窓会が開催されました（ゐのはな同窓会報第197号に掲載）。その過程でおおよそ全ての同期生と連絡をとりましたところ、同期生の中には喜んで同窓会に参加したいと言う方もいれば、今後連絡をとらないでほしいと言う方もいました。当たり前のことですが、メンバーの勢揃いも含めてあの頃は二度と戻りませんし、あの頃の意味づけは人によって多様であることを実感しました。同窓会の開催にあたり、参加者にアンケート（参加者47名中返答30名）を取りましたので一部共有いたします。勤務先は東京都が12名・千葉県が10名と多く、留学経験は３名、勤務医24名・開業医６名、子供の人数３人が６名・２人が15名・１人が９名でした。その他、子供は（千葉大学）医学部に入れたいか、今の趣味や健康への興味、皆におすすめしたいこと、医学部時代について（今だから言えること、医学部生時代の自分に伝えたいこと）などを共有して盛り上がりました。私としては、この少子化の時代に子供が３人もいる家庭が多かったことに大変驚きました。千葉大医学部卒の素晴らしい親から生まれたご子息が今後の千葉県や日本を支えてくれることを期待しております。

猛暑が続きますが、皆さまのご健康とご多幸をお祈り申し上げます。　　大西俊一郎（平17）


**― 会報201号編集委員 ―**

菱木　知郎（平５）編集委員長
杉田　克生（昭54）　白澤　　浩（昭57）
剣持　　敬（昭58）　今野　　慎（昭62）
小島　広成（平３）　宍戸　忠幸（山梨医大・平８）
大西俊一郎（平17）　　（敬称略）